

早稲田大学演劇博物館開館百周年応援イベント

素浄瑠璃公演

浄瑠璃／豊竹若太夫

三味線／鶴澤清介

ツレ鶴澤清允

豊竹若太夫

鶴澤清介

児玉竜一

こもちやまんば

《座談会》

豊竹若太夫×鶴澤清介

聞き手／早稲田大学演劇博物館館長

児玉竜一

「こもちやまんば」 山姥廓啖の段

2025年

12月19日<金>18時開演 | 早稲田大学小野記念講堂

17時30分開場/19時45分終演予定 東京都新宿区西早稲田1-6-1、27号館 地下2階

料金:一般 5,000円(全席指定・税込・160席)／学生 無料(40席)

※収益の一部を早稲田大学演劇博物館へ寄附させていただきます。

【お申し込み】2025年11月10日<月>10時～ ※一般席は先着順に前方より席をお取りします。

◎一般／コテンゴテンウェブサイトの当公演ページ ◎学生／早稲田大学演劇博物館ウェブサイト

【お問い合わせ】コテンゴテン

◎Webフォーム coten-goten.com/contact.html ◎Tel.070(8428)8515 ※留守電対応

【主催】(株)コテンゴテン 【共催】早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

100th
ENPAKU 2025



一般の方
お申し込み



学生の方
お申し込み



問合せフォーム

素淨瑠璃公演

ともちやまんば

「**嫗山姥**」**廓**「**噺**」の段

開催にあたり

創立者である坪内逍遙の意志によって、演劇博物館は、日本演劇のみならず、古今東西にわたつて、演劇に関する資料すべてを収集して参りました。1,000,000点をこえる貴重な資料を、将来にわたつて伝え続けるために、収蔵庫の整備、整理体制の強化などをはかるために、開館百周年記念の募金活動をはじめております。みなさまのお力添えを、切にお願ひ申し上げます。

この素浄瑠璃公演は、「早稲田大学演劇博物館開館百周年応援イベント」と銘打っております。コテンコテンさんに主催していただき、ご来場のみなさまから入場料を頂戴して、その浄財の一部を、演劇博物館へのご寄付としていただこうことになっております。

演劇博物館では、これまでもさまざまな実演を企画して、みなさまにお楽しみいただいておりますが、これからもいろいろなジャンルでの催しを模索して参りたいと存じます。

今回、いわばその第一弾として、すでにたびたび素浄瑠璃をお願いして参りました豊竹若太夫師・鶴澤清介師のおふたりに、満を持してご登場いただく次第です。

演劇博物館および早稲田大学と素浄瑠璃の催しは、昭和二十年代の豊竹山城少掾受領記念の「道明寺」に始まり、四代目竹本越路太夫の「厄ヶ崎」、五代目豊竹呂太夫と豊竹咲太夫による復曲や、英太夫時代の豊竹若太夫・豊竹呂勢太夫による稀曲の演奏など、数々の名演の歴史を築いて参りました。

豊竹若太夫・鶴澤清介両師には「志渡寺」「袖萩祭文」をお願いして、今回は3回目となります。演奏の後には、お話をうかがう機会も設けておりますので、定評あるおふたりの楽しい芸談もお楽しみいただければと存じます。

早稲田大学演劇博物館館長 児玉竜一

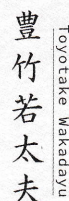
上演作品について

「唄山姥」は、正徳2年（1712）7月竹本座上演と推定される全五段の時代物で、作者は近松門左衛門です。源頼光とその四天王を中心に、坂田金時出生譚などを描きますが、今回上演されるのは、二段目切にあたる「兼冬館」です。「八重桐廓話」あるいは「しゃべり山姥」など、いくつかの通称で知られていますが、近年の文楽の通例に従って「廓話の段」としました。

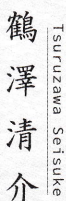
八重桐というのは、女武道の役柄や長セリフの芸で知られた女方の名手、萩野八重桐を踏まえています。萩野八重桐が同じ年の春に、「ひがん桜」で紙衣姿の文売りとなつて、男への恨み言を長々と述べるというしゃべりの芸が大当たりを取りました。それをそつくりそのまま浄瑠璃にしたのが、この段前半の聴かせどころ。身分のある者が、身分を隠して市井に紛れて、再興の機会をうかがうという、元禄歌舞伎以来くりかえし親しまれてきた「やつし」の芸を浄瑠璃にして、煙草売りの源七と姿を変えて三味線をつま弾くのは、実は坂田藏人時行。自分に縁あるその歌を聴いて、文売り（ラブレター）の代筆屋（の口上）によつて館の内に招かれて、夫時行と対面することになるのが八重桐。逃げ隠れする夫への当てつけに、三角関係から遊女の争いとなる廓の騒動を克明に語る、廓を舞台に、歌舞伎と浄瑠璃の芸が行ったり来たりする楽しさを描き出します。

ところが、時行が身をやつしているのは敵討ちのためなのですが、なんと敵討ちはとつくに済んでいた。それを知った時行は自害して、魂は八重桐の胎内に宿つて再び生まれ出ようとするという、たいへんな展開になります。

廓を細密に描く描写から、人間わざをこえたスケールまで、語り物としての義太夫節の可能性を存分にお楽しみください。



1967年三代竹本春子太夫入門。祖父・十代豊竹若太夫（人間国宝）の幼名を継ぎ、豊竹英太夫と名乗る。後に四代竹本越路太夫（人間国宝）の門下となり、祖父の血筋と師匠の芸を受け継ぎながら早くから将来を囑望される存在となった。八代目綱太夫・三代目春子太夫ら異なる系統の太夫からも稽古を受けた芸歴は、今日の文楽界において極めて貴重である。明治初期から続く名跡・豊竹呂太夫を襲名後、自らの芸と立ち位置を確立し、2024年4月、いよいよ十一代目豊竹若太夫を襲名。竹本義太夫に次ぐ大名跡であり、祖父の名でもある「若太夫」を五十七年ぶりに復活させたことは、芸の継承と新たな時代への決意を象徴するものである。



1973年二代鶴澤道八に入門。翌年鶴澤清介と名乗り朝日座で初舞台を踏む。剛柔を兼ね備え、古典から新作まで幅広い芸域で作品の魅力を造形してきた。2012年には三谷幸喜作の新作文楽『其礼成心中』の作曲を手がけ、今年は十三年ぶりとなる三谷作品『人形ざらい』に取り組み、その手腕を改めて示した。また、近年ではYouTubeでの発信にも取り組み、舞台裏や三味線の魅力を広く伝えている。こうした意欲的な取り組みは文楽の創作面を支える存在としても注目されている。演奏後の座談会では、精妙にして洒脱、どこまでも続くかと思わせる話術で聴衆を魅了し、文楽三味線の奥深さを語る稀有な語り部としても貴重な存在である。